

## 平成 15 年度研究功労賞推薦書

受賞対象者 山口成良先生

山口成良先生は昭和 23 年に第 4 高等学校を卒業された後、現在の金沢大学医学部の前身である金沢医科大学に進まれ、昭和 27 年に同大学を卒業されました。翌 28 年に現在日本のてんかん学の碩学であられる秋元波留夫教授が主宰されていた同大学の神経精神医学教室に入局され、昭和 34 年に講師になられた後、昭和 36 年 8 月から 2 年間アメリカ合衆国カリフォルニア大学ロサンゼルス校 (UCLA) 脳研究所の、上行性脳幹網様体賦活系の発見で有名なマグーン教授の下に留学されておられます。帰国後、昭和 43 年に金沢大学医学部神経精神医学講座助教授、昭和 47 年に現在私の居ります金沢医科大学神経精神医学講座の教授に就任されましたが、昭和 50 年 5 月に母校の金沢大学医学部神経精神医学講座に教授として移られておられます。以来、平成 6 年 3 月に同大学を定年退職されるまでの約 19 年間、日本の精神医学界の重鎮として活躍されました。

先生の研究業績は睡眠やてんかんが主であります。教授になられてからは後進を指導して幅広いものがあります。とくにてんかんに関する代表的なものを振り返ってみますと、先生は昭和 31 年に「無麻酔犬視床の電気刺激症状」と題する精神誌に発表された御自身の学位論文で、イヌの汎性視床投射系の電気刺激により全般けいれん発作が誘発されることを報告しており、これは Penfield らの中心脳発作と同様に全般発作の起源に脳幹とくに汎性視床投射系が関与することを示唆する先駆的研究として特筆されるものです。また昭和 35 年にやはり精神誌に阿倍完一、岡部健一郎、中村五暁先生の名前で相次いで発表された「犬の実験けいれんに及ぼす中脳および延髄切離の影響について」、「犬の延髄におけるけいれん放電の伝導に関する神経生理学的研究」、「実験けいれんにおける発作放電の脳内波及について」と題する一連の論文は先生が指導された学位論文で、全身けいれん発作時の発作波の脳内伝播とくに錐体路や錐体外路の関与を実証した研究としてやはり特筆されるものです。金沢大学医学部神経精神医学教室の教授になられてからも、先生はてんかんの臨床や実験研究に関する後進の指導に力を入れられ、とくに現在高松病院副院長の倉田孝一先生や介護老人保健施設「サンセリテ」の木戸日出喜先生らが中心に行った抗てんかん薬の血中濃度に関する臨床研究、福井医科大学精神医学講座教授の和田有司先生や現在浜松医科大学精神神経医学教室講師の三辺義雄先生らが中心に行ったキンドリングに関する実験研究、さらに私や現在の私の教室の助教授であります窪田 孝先生らが中心に行った実験てんかんの研究や SPECT などの脳画像に関する臨床研究なども先生の学問に対する先見の明や、また何ごとも自らが率先して行う進取の精神、そしててんかん研究に対する熱心な御指導の結果とって過言ではないと思います。なお私と和田先生はそれぞれ日本てんかん学会より実験研究で Juhn and Mary Wada 奨励賞を頂いていますが、これ

らも先生の御指導の賜物といえます。退官されてからも現在、単科の精神病院で金沢市内にある松原病院の院長として診療にあたられ、勿論てんかん患者も診療されておられますが、平成9年には、このてんかん治療研究振興財団からの研究助成で「てんかんの国際分類（1989年改訂）に基づく症例検討に関する研究」と題して皆様方多数の協力を得まして81例の166頁に及ぶ症例集を刊行していますし、また最近中山書店から刊行されました臨床精神医学講座にも「てんかん発作の鑑別診断—偽発作」や「抗てんかん薬の歴史と分類」、「てんかんの治療史」と題する著書を執筆されています。以上に述べたてんかん研究に関する多数の業績に加えて、幾つになられても変わらない研究や学問に対する情熱や努力、またその真摯な姿勢に本当に心から敬服する次第です。

先生は教授在任中、昭和42年から昭和56年まで日本てんかん研究会幹事、昭和56年から平成9年までは日本てんかん学会の理事として学会の運営に寄与され、昭和63年には第22回日本てんかん学会を会長として金沢で開催されています。また北陸におきましては昭和52年に北陸てんかん懇話会を設立し、平成12年まで会長として北陸三県のてんかんの研究や診療の発展に貢献されています。なおこれらの功績から平成10年には第16回日本てんかん協会木村太郎記念賞を受賞されておられます。

以上のように山口成良先生の日本のてんかん学ならびにてんかん医療における御功績は誠に顕著なものと申せます。

金沢医科大学神経精神医学教室教授  
地引逸亀